

衣生活領域「被服材料の学習」に関する学生の理解の現状と課題 —小学校教員免許取得希望者の場合—

雙 田 珠 己

The Current Level of Understanding of Students on “The Studies of Materials”
in the Field of Clothing and Its Issues
—A Case Study on Students Aiming to Obtain Elementary School Teacher’s License—

Tamami SODA

Abstract

The purpose of this study is to investigate the consciousness and knowledge of university students concerning clothing materials, and to clarify how much the knowledge acquired through classes on clothing is actually useful in identifying fabrics. A questionnaire survey was conducted on 108 students, 53 men and 55 women, who are studying to obtain an elementary school teacher’s license and who were also actually asked to identify the materials of 10 kinds of fabric.

As a result, it was found that most of the students did not have a positive image for the studies in the field of clothing, and that many felt the lectures on clothing material were boring. The average scores (on the scale of one to five) for the questions concerning the characteristics of the fiber were men 1.81 and women 2.89, women having higher scores. Compared to the average score results of 1989 (men 1.76 and women 3.16), when men and women still attended classes separately, it shows that men’s scores have somewhat risen while the women’s have fallen, and there is a growing concern for the decline in women’s interest and motivation. In addition, when asked to identify the materials of 10 kinds of fabric, the students were able to identify natural fabrics such as cotton, wool, and linen, but many could not identify fabrics such as silk and synthetic fiber that they were unfamiliar with. Abundance in knowledge on most fibers had almost no influence on the ability to identify it. However, those with more knowledge of linen were able to identify it more correctly. ($p < 0.05$).

Key Words : the studies of materials in the field of clothing, students aiming to obtain elementary school teacher’s license, questionnaire

はじめに

被服材料の知識は、衣服を購入する際に不可欠なものであり、衣生活を営むうえでの基礎的な知識となっている。小・中・高等学校の家庭科被服分野では、それぞれの発達段階に応じて学習内容が段階的に扱われており、被服に用いられている繊維・糸・織物・編物の種類や基本的な性質と、実際に使用するうえでの消費性能にかかわる内容が授業で取り上げられている。その効果もあって、被服学を履修している学生を対象にした被服材料関連用語の浸透をはかる調査では、用語に対する認識の高さは、被服を学んだ学習期間の長さに関連することが報告され

ている(廣田1998, 小島・甲斐1993)。しかし、一方では、衣服購入時に学んだ知識を活用し、繊維の素材や洗濯のしやすさを重視する人は少ないという報告もあり(甲斐・小島1993)、被服材料の性質を暗記する機会が多く、知識としての定着率が高いが(永田2003)、そこで得られた知識が実生活で活用できるものと認識している人は少なく、学生の被服材料に対する関心の高まらないことが示唆されている。

そこで、本研究では、本学教育学部の男女学生を対象に、さまざまな素材の布地を今までの知識と経験、布地の外観と風合いから分類させ、被服材料に関する基礎知識が実際の生活でどの程度活用されるのかを明らかにすることを目的とする。調査は、ま

ず、被服材料の学習に対する学生のイメージを把握するため、家庭科のイメージおよび家庭科の履修状況に関する調査（雙田・鳴海 印刷中）を行い、次に、被服材料に対する意識と基礎知識を調査し、大学生の知識の定着状況について分析を行う。さらに、実際に布の感触と風合いから布の素材を識別する調査を行い、布地を識別する能力の現状を明らかにする。なお、知識の質問については、男女共修前の学生を対象に行った調査結果（甲斐・小島1993）と比較し、被服領域の学習成果について考察する。

方 法

1. 調査対象者・調査期間・調査方法

調査対象者は、熊本大学で「家庭B組」を履修した小学校教員養成課程の大学2年生（男子53名、女子55名、計108名）で、調査期間は2007年7月である。

調査は、初回の授業において調査用紙および試験布を配布し、授業内に回答・回収する方法で行った。

2. 調査内容

調査は、次の4つの内容について行った。なお、本調査で被服と表記するものは、学習指導要領および教科書で衣生活領域として表記されるものと等しい意味で用い、学生が衣生活領域の学習内容を一般的に被服と呼称することを考慮しこれを用いた。また、回答の対象となる家庭科および衣生活領域の学習内容は、小・中・高等学校で学んだすべての学習とした。

- (1) 家庭科・衣生活領域に対するイメージについて
Q1 家庭科でおもしろかったことは、Q2 家庭科でつまらなかったことは、Q3 被服でおもしろかったことは、Q4 被服でつまらなかったことは、Q5 女子生徒は被服を、Q6 男子生徒は被服を、Q7 私がもし被服を教えるとしたら、Q8 これからの被服はもっと。質問紙は、講義の第1回目にすべて文章完成法で回答させ回収した。
- (2) 被服製作の履修状況について Q1 ミシン縫い、まつり縫い、並縫いの履修状況、Q2 小・中・高等学校での被服製作で製作したすべての作品。
- (3) 衣生活に対する意識と知識
 - ①衣生活について Q1 衣服の衝動買いの経験、Q2 衣服を購入する時の重視点（選択肢は後掲図1参照）、Q3 日頃の洗濯とのかかわり。
 - ②知識について 甲斐・小島（1993）が行った調査に基づき、現行の中学校学習指導要領の範囲を確認し質問を作成した（表1）。
- (4) 布地の素材識別能力 布地の識別に関する質問

紙を表2に示す。試験布の詳細は、表3に示す10種類の試験布を1セットとし、対象者は、6人を1グループとし18グループとした。試験布はグループごとに1セットずつ配布し、調査票は各人に配布した。

表1 知識に関する質問

(1) 繊維の分類について、それぞれあてはまるものを下のア〜クの中から2つずつ選んでください。

①動物性繊維	{ }	{ }	②植物性繊維	{ }	{ }
③再生繊維	{ }	{ }	④合成繊維	{ }	{ }

ア ポリエステル イ 綿 ウ レーヨン
エ 毛 オ アクリル カ 絹
キ 麻 ク キュプラ

(2) 繊維の性質について、最もあてはまるものを上のア〜クの中から選んでください。

①保温性に優れている。熱やアルカリに強い。	{ }
②シワになりにくい。吸湿性に乏しい。	{ }
③汗などの水分を吸いやすい。シワになりやすい。	{ }
④光沢がある。日光で黄変する。	{ }
⑤シワになりやすい。水に濡れると強度が低下する。	{ }

(3) 中性洗剤で洗濯したほうがよいものを上のア〜クの中から2つ選んで下さい。

表2 布地の識別について

繊維を識別しよう(No.1~10を対象とします)

(1) 綿物（ニット）は { } { }

(2) 不織布は { }

(3) 絹は { } { } { }

(4) 毛は { } { } { }

(5) 麻は { }

(6) 絹は { }

(7) ポリエステルは { } { }

(8) あなたが、今着ている上衣の素材は何ですか { }

(9) 上衣の素材は、あなたの予想どおりでしたか
1. 予想どおり 2. ある程度予想どおり 3. まったく違う

(10) あなたは、自分自身の繊維に対する知識と実際に識別する力をどのように評価しますか？

表3 試験布

番号	素材	布地の名称	たて糸(本/cm)	よこ糸(本/cm)
1	綿100%	ブロード	28	19
2	綿100%	帆布	11	10
3	ポリエステル100%	フリース	—	—
4	毛100%	フェルト	—	—
5	綿100%	メリヤス編み	15	24
6	毛100%	メリヤス編み	7	7
7	絹100%	羽二重	33	44
8	ポリエステル100%	デシン	52	51
9	アセテート100%	サテン織り	44	53
10	麻	平織り	27	28

3. 分析方法

家庭科・衣生活領域のイメージ調査については、文章完成法で回答されているため、1文または1語句を1つの回答として集計することを原則とし、複数の文、語句が記載されている場合は複数回答として扱った。項目ごとに全回答数を求め、それを母数として扱った。また、知識および布地の識別能力は、正答数を得点として数値化し集計を行った。

すべての質問は、性別でクロス集計し χ^2 検定を

行った。また、被服材料に関する知識が実生活で活用される様子を把握するため、知識と購入時の重視点、布地の素材判別能力とクロス集計し χ^2 検定を行った。さらに、洗濯に関する知識についても、日頃の洗濯とのかかわり方とクロス集計し χ^2 検定を行った。

結果と考察

1. 家庭科・衣生活領域に対するイメージ

本論文では、論文の趣旨とかかわりの深い前掲Q1からQ4の結果について述べる。

まず、「家庭科でおもしろかったこと」として最も多くあげられたのは、「調理実習」で男子79.3% (n=58), 女子67.1% (n=70) がこれを回答した。「被服製作」は2番目に多くあげられた内容であったが、回答数は全体で14.8% (N=128) と少なく、調理実習との差は大きかった。反対に「家庭科でつまらなかったこと」の記述内容では、教科書を中心とした「講義」をあげる人が最も多く、男子50.0% (n=52), 女子41.8% (n=55) であった。

次に、被服に領域をしぼり、「被服でおもしろかったこと」についてたずねると、「製作・実習」をあげる人が男女ともに多く、男子48.1% (n=54), 女子61.7% (n=60) あり、全体の約5割が作品名や実習の内容について具体的な記述をしていた。次いで多かったのは、男子は、ミシンを使う楽しさ等を記述した「ミシン・道具」に関する内容であった (24.1%, n=54)。男子がミシンをおもしろいと感じる傾向は、三輪等 (2001) の報告にもみられ、興味深い結果といえる。一方、女子は、ものを作る楽しさ、形になる喜びについて記述した「製作過程での体験」があげられた (21.7%, n=60)。

反対に、「被服でつまらなかったこと」については、基礎縫い、手縫いなどの基礎練習的な「製作・実習」をあげる人が多く、男子の34.6% (n=52), 女子の24.1% (n=58) が回答した。「授業形態・指導方法」をあげた人も多く (19.1%, N=110), 教科書中心の授業、細かい内容の暗記に対する不満の記述がみられた。本論文のテーマとかかわりの深い、繊維や素材の性質についての授業をつまらなかったと記述した人は、全体の約1割であった。

これらの結果は、首都圏の大学生を対象とした調査結果 (雙田・鳴海 印刷中) とほぼ同じ傾向を示した。家庭科では調理実習の印象が一番強く、男女ともに他の内容を大きく引き離すことは、永田 (2003) の調査結果にもみられる傾向である。調理実習に限らず学生は講義よりも実習を好むが、講義をつまらないと感じる理由の多くが、「教科書を読

むだけの授業」、「黒板を写すだけの授業」、「細かい内容の暗記」であることから、教師の授業展開にも工夫が必要であると考察された。

2. 被服製作の履修状況

表4は、小・中・高等学校の家庭科の授業で製作した作品を調査した結果である。小学校は製作した作品数が323点と最も多く、反対に高等学校では作品数が61点と少ない結果であった。しかし、製作している内容は、作品名でみるかぎり小学校と高等学校に差はみられず、小物作りが中心であった。被服として着用できるものの製作は、中学校でパンツの製作をした人が17名で最も多く、パーカー、Tシャツ、パジャマ、じんべえ、ゆかたなどが、若干名ずつみられた。

「被服がつまらない」と感じる理由の中には、「繰り返し同じものを作る」、「実用的でないものを作る」といった記述もみられ、男女ともに「洋服を作りたい」という要望もみられた。実際に衣服の製作まで望む人は少ないとしても、高校生になっても小学校で作ったエプロンを製作することに、物足りなさを感じる人は多いと推察される。

近年、被服製作の時間は、学習指導要領の改訂のたびに削減される方向にある。しかし、それを受ける教育現場が、時間枠の制約、基礎技術の習得、生徒の負担の軽減という条件を満たすために、発達年齢に関係なく小物作りを繰り返し行う授業を選択しているのであるならば、被服製作の意義を根本的に問い直し、現代生活に求められている形に再構築する必要があると思われる。被服が商品となり、作ることが少なくなった現代社会であるからこそ、児童・生徒にとって最も身近な存在である被服について、その構造を踏まえた知識と基礎的な技術を取得できるように、家庭科は保証する必要があるだろう。

表4 家庭科の授業で製作した作品数

		(複数回答)			
		小学校	中学校	高等学校	合計
小物作り	小物	78	28	7	113
	袋	91	20	4	115
	カバー	30	15	0	45
	エプロン	80	13	25	118
	敷物	9	10	9	28
	ふきん	22	15	10	47
	ウォールポケット	10	8	0	18
	パンツ	1	17	0	18
	パーカー	0	1	1	2
	Tシャツ	0	1	0	1
被服	ブラウス	0	0	0	0
	パジャマ	0	1	0	1
	ベスト	0	0	1	1
	はんでん	0	0	1	1
	じんべえ	0	1	0	1
	ゆかた	0	3	0	3
	ジャケット	0	0	0	0
	その他	2	8	3	13
	覚えていない	2	17	18	37
	何も作らない	0	6	40	46
作品数合計 (覚えていない、何も作らないを除く)	323	141	61	525	

3. 衣生活に対する意識

- (1) 衣服の衝動買いについて 衣服の衝動買いを「まったくしない」から「よくする」, までの4段階評価で評価をさせた。その結果, 男女ともに衝動買いを「ときどきする」人が多く, 男子は37.7% (n=53), 女子は63.6% (n=55)であった。反対に「まったくしない」人は, 男子が22.6%, 女子が3.6%で, 女子の方が衣服の衝動買いをしていることが明らかになった ($\chi^2 = 13.2$, $fd = 1$, $p < 0.01$)。
- (2) 購入時の重視点 図1は, 衣服を購入するとき重視していること(複数回答)を男女別に示したものである。最も重視していることは, 男女とも色・デザインで95.4% (n=108)の人が該当した。次いで重視していることを男女別に列挙すると, 女子は価格(94.5%), サイズ(90.9%), 自分に似合う(89.1%), 他の服との調和(81.8%), 素材(41.8%)で, 自分の好みを中心に価格, サイズ, 素材まで視野に入れた選択をしていた。一方, 男子(n=53)はサイズ(83.0%), 価格(73.6%), 自分に似合う(64.2%), 他の服との調和(45.3%), 着心地(41.5%)で, 重視する項目はほぼ同じであったが, 価格, 自分に似合う, 他の服との調和, 素材の項目で, 女子よりも該当者が少なかった。すなわち, 衣服を購入するとき, 男子は自分に似合うか, コーディネートがしやすいかという意識が低く, 個々のデザインに対する好みとサイズを重視

して購入しているといえた。一方, 男女ともに重視していなかった項目は, 洗濯方法など被服管理にかかわる項目が多く, ブランドや流行についてもあまり重視していない傾向がみられた。

4. 被服材料に関する知識

- (1) 知識レベルの変化—1989年と2007年の比較—
 繊維の分類は, それぞれ2点満点で得点を求め, 男女別に1989年と2007年で比較した。比較の対象とした1989年の結果は(甲斐・小島 1993), 家庭科が男女共修になる前のものであり, 特に男子の学習効果をみるために適していると考えこれを用いた(男子n=174, 女子n=280)。まず2007年についてみると, 男女ともに天然繊維の正解率は高く, 2点満点の割合を男女別にみると, 動物繊維については男子84.9%, 女子92.7%, 植物繊維については男子83.0%, 女子96.4%という結果であった。それに対し, 化学繊維は低い結果となり, 再生繊維については男子50.9%, 女子49.1%, 合成繊維については男子52.8%, 女子56.4%であった。さらに2007年の結果を1989年と比較すると, 動物繊維については, 男子+27.3ポイント, 女子+10.2ポイント, 動物繊維については男子+5.9ポイント, 女子+10.7ポイント, 再生繊維については男子+9.5ポイント, 女子+13.7ポイント, 合成繊維については男子+2.8ポイント, 女子+16.4ポイントで, いずれも正答率の向上が認められた。

次に, 繊維の性質については, 5点満点とし得点の分布を図2に示した。男子は0点の割合が大きく減り, 1, 2, 5点の割合が増加した。それに対し女子は, 1989年に最も多かった4点が16ポイント下がり, ピークが3点に減少していた。さらに, 各年男女別に平均点を求めると, 男子は1989年が1.76, 2007年が1.81で+0.05, 女子は1989年が3.16, 2007年が2.89で-0.27となった。これより, 男女共修にともない男子の知識の定着はある程度向上が認められたが, 女子の定着率に低下がみられ家庭科に対する意欲の減少が懸念された。

最後に洗濯に関する問題の得点を図3に示す。男女ともに2007年の正答率は1989年よりも下がっており, 0点の割合が男子は16.4ポイント, 女子は13ポイント増えていた。被服管理に対する関心が低いことは, 購入時の重視点の回答からも明らかであったが, 繊維の基礎的な知識が, 日常生活に応用できない学生の力不足もあらためて示された。さらに, 自分で洗濯をする人(n=56)と,

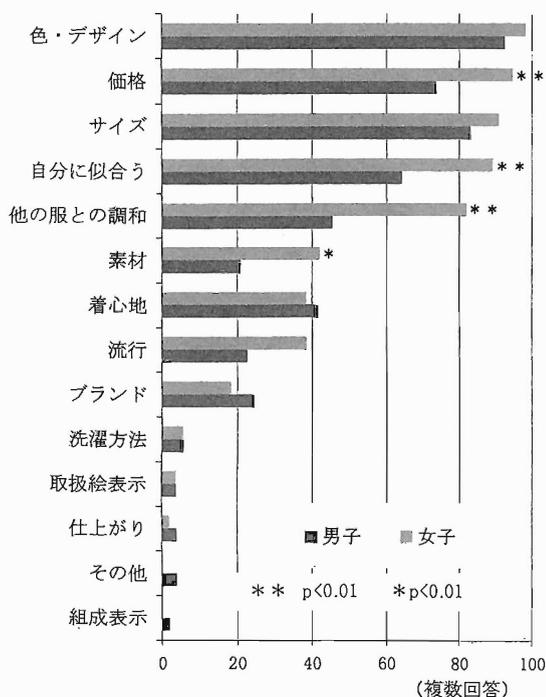


図1 購入時の重視点

自分では洗濯をしない人 (n=52) の2群にわけ、洗濯に関する知識とクロス集計を行ったが、洗濯の実施状況と得点に有意な違いは認められず ($\chi^2=2.04$, $df=2$, $n.s$), 生活経験と知識の結びつきはみられなかった。

(2) 布地の素材識別能力 試験布は前掲表3に示すように、綿、毛、麻、絹、ポリエステル、アセテートの6種類の素材を用いた。同じ素材で編織が異なるものも含め、綿はメリヤス編み、ブロード、帆布の3種類、毛はメリヤス編み、フェルトの2種類、ポリエステルはデシン、フリースの2種類とした。なお、アセテートはサテン織りのものとし、試験布として用いたが、回答する5種類の素材には含まれていない。表5に5種類の素材を外観と風合から判別させた結果を示す。布地の識別はグループごとに行ったため、個人の識別能力を正確に反映するものではないが、対象者全

体の傾向を把握することは可能であると判断した。まず、編物(ニット)および不織布の識別であるが、ほぼ全員が、セーターを連想させる毛のメリヤス編みを編物と理解していた。それに対し、綿メリヤス編みを編物と識別できた人は少なく男子64.2%、女子72.7%であった。編物の伸縮性のよさは、身近なTシャツなどを例に小中学校の家庭科の授業で必ず触れる内容であるが、学生の意識のなかでの定着率は低いと思われた。それに対し不織布は、文字の意味から形状を推測しやすいこともあり、95%近くの人が正答していた。次に、素材の識別であるが、日常的に馴染みのある綿と毛は、形状の変化に関わらず正答率が高かった。反対に、日常的に馴染みのない絹は風合いを知らない人も多く、また、ポリエステルデシンの風合いやサテン織りの光沢と識別しにくいいため正答率は低かった。特にポリエステルについては、風合いがさまざまに変えられることもありイメージがつかみにくく、日常よく着用している繊維でありながら2問とも正答した人は全体の約1割であった。麻は、日常的に触れる機会の少ない繊維でありながら、独特の感触から想像しやすいため例外的に正答率が高かった。

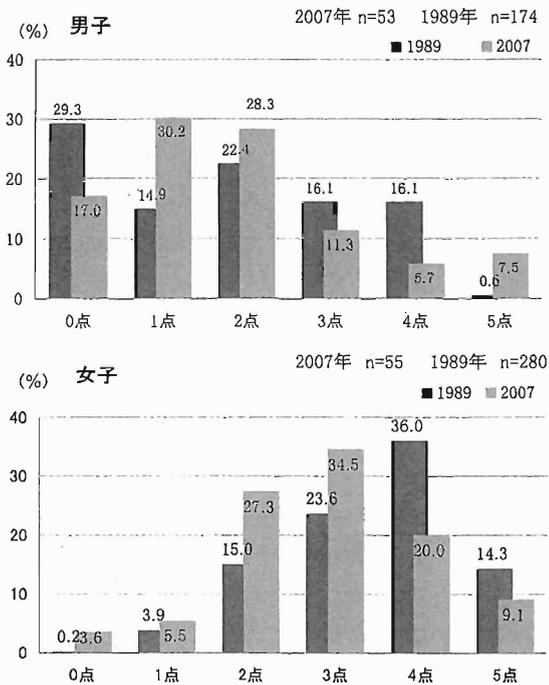


図2 繊維の性質についての得点分布

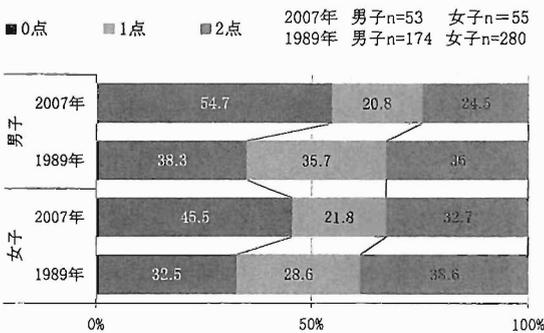


図3 洗濯に関する問題の得点分布

表5 布地の素材識別能力

試験布	性別	得点 (%)			
		0点	1点	2点	3点*
編み物	男子	5.7	30.2	64.2	—
	女子	0	27.3	72.7	—
形状の違い	男子	7.5	1.9	90.6	—
	女子	0	1.8	98.2	—
綿	男子	1.9	9.4	26.4	62.3
	女子	0	0	9.1	90.9
毛	男子	3.8	58.5	37.7	—
	女子	0	72.7	27.3	—
繊維素材の違い	麻	男子	17.0	83.0	—
	女子	0	100.0	—	—
絹	男子	45.3	54.7	—	—
	女子	41.8	58.2	—	—
ポリエステル	男子	26.4	60.4	13.2	—
	女子	12.7	81.8	5.5	—

* 綿のみ試験布を3枚とし、3点満点とした。また、麻と絹は試験布を1枚とした。

(3) 繊維に関する知識が実生活におよぼす影響 前述の結果を踏まえ、繊維に関する知識の多寡が、実生活での布の識別や衣服への関心に与える影響を分析した。繊維に関する知識の多寡の判断は、繊維の性質の回答に基づき求めることとし、0, 1, 2点を知識の少ない群 (n=60), 3, 4, 5点を知識の多い群 (n=48) とした。再編成した2群と布地の素材判別能力をクロス集計した結果、麻については、知識の少ない群の方が識別能力の低

いことが明らかになったが³ ($\chi^2=4.4$, $df=1$, $p<0.05$), ニット ($\chi^2=2.5$, $df=2$, $n.s$), 不織布 ($\chi^2=3.3$, $df=2$, $n.s$), 綿 ($\chi^2=4.1$, $df=3$, $n.s$), 毛 ($\chi^2=1.9$, $df=1$, $n.s$), 絹 ($\chi^2=1.3$, $df=1$, $n.s$), ポリエステル ($\chi^2=4.5$, $df=2$, $n.s$) については, 知識の多寡による識別能力の差は認められなかった。また, 知識の2群と購入時の素材の重視度をクロス集計すると, 繊維に関する知識の多い人は, 購入時に素材を重視する人としなない人が2分される結果となったが, 知識の少ない人では76.7%が素材を重視しない結果となり, 繊維に関する知識の少ない人は素材に対する意識が低いと考察された ($\chi^2=4.2$, $df=1$, $p<0.05$)。

- (4) 学生による被服材料に関する知識と識別能力の自己評価 被服材料に関する質問の正答率と実際の識別能力の有無を自己評価させ, 感想を自由記述させた (N=108)。その結果を分析すると, 「知識も識別能力も不十分であった」(50%), 「知識は十分でないが, 日常生活の体験から少しは識別できた」(38.9%), 「知識も識別能力も十分だった」(7.4%) という結果となり, 識別能力の低さを認識した人が多かった。表6は代表的な記述例を原文のまま掲載したものである。実際に感触を確かめることにより, 被服材料に関心を持つきっかけとなったという記述も複数みられ, 小・中・高等学校の授業で教材として発展させる可能性も示唆された。

表6 学生による被服材料に関する知識と識別能力の自己評価

- 意外に当たっていてびっくりした。今後も繊維について学びたいと思う。
- なんとなく普段使用しているものの感覚から識別した。感覚はあてにならない。また, 繊維に関する知識もない。普段から気にかけて布地を見るくせをつけるべきだ。
- 予想以上に識別することができて少しうれしかった。しかし, 知識がまだまだ足りないなあと思った。
- 綿とポリエステルしか知識, 識別する力がありませんでした。しかし, この2つでさえもたくさんの布があると混乱してしまいました。
- フリースとフェルト, サテンと絹を見分けるのが難しかった。勘違いして覚えている繊維もあったので, 今回覚えられてよかった。
- 知識も, 識別する力もどちらも乏しい。
- 小・中学校での知識がうろ覚えだったこと, 実際に布地をさわったり観察しながら学んだわけではないので, 識別する力はほとんどなかった。また, 織り方でも見た目が変わってくるのだなと驚いた。
- 実際にさわってみてけっこう自信があった予想も外れていたので驚いた。識別する力はあまりないと思う。
- 知識も重要ですが, 実際に識別する力の方が大切だと思います。知識がいくらあっても実際に布をさわったり見たりして何の素材か分からなければ何の役にも立たないからです。
- 見た目とさわった感じだけである程度は分かった。

●中学のころ繊維の授業があまり好きではなかったのですが, あまり繊維に対する知識はないのではないかと思います。でも今日, 実際触りながらやってみると, 意外に分かるものだなと思いました。

まとめ

小・中・高等学校の被服材料の学習に対する意識と知識の実態を調査し, 授業で学んだ知識が, 実際に繊維素材を識別するうえでどれほど役立つかを明らかにした。調査は, 小学校教員免許取得希望者の男子大学生53人, 女子55人の計108人を対象に, 被服材料に関する意識と知識を質問紙法で行い, さらに, 10種類の布について素材を識別した。

その結果, 対象者のほとんどは被服領域の学習がおもしろいというイメージをもっておらず, 特に被服材料の講義は, つまらないと感じる学生が多かった。繊維の性質に関する質問(5点満点)の平均点は, 男子1.81, 女子2.89で, 女子の方が高かった。これを男女共修前の授業を受けた1989年の平均点(男子1.76, 女子3.16)と比較すると, 男子の得点は若干上昇したが, 女子は得点が0.27点下がり興味意欲の減退が懸念された。さらに, 学生に10種類の布の素材を識別させたところ, 綿・羊毛・麻などの天然繊維は正しく識別できたが, 馴染みのない絹や化学繊維は, 識別できない人が多かった。繊維に関する知識の多さは, 布を識別する能力にほとんど影響していなかった。しかし, 麻については, 知識の多い人ほど正しく識別できる結果が得られた ($p<0.05$)。被服材料学の学習は, 講義が中心の退屈な授業というイメージをもつ人が多かったが, 小・中・高等学校で繰り返し学習をし, 日常的な体験が加わることによって, 天然繊維に対する知識の定着率と綿と毛の識別能力は高かった。それに対し, 馴染みのない繊維については, 知識だけではイメージをもてない人が多かったことから, 識別する能力は低かった。そのため, 被服材料学の学習ではさまざまな繊維や布地に触れさせ体験させることが必要であり, 知識だけでなく感覚的に認識させることの重要性が感じられた。今後の被服材料学の学習では, 学んだ知識が日常生活の中に結びついていくことを実感させる工夫がますます必要になるといえる。

引用文献

- 廣田恵美（1998）家庭科教育における被服材料関連用語の扱い—小・中・高等学校の教科書分析及び用語の認識度からの検討—, 日本家庭科教育学会誌, 第41巻, 第3号, 89.
- 甲斐今日子, 小島郷子（1993）家庭科被服領域における「被服材料教育」の重要性（第1報）—大学生の衣生活の実態と現行の被服領域の問題点—, 佐賀大学教育学部紀要, 第41巻, 139-149.
- 小島郷子, 甲斐今日子（1993）家庭科被服領域における「被服材料教育」の重要性（第2報）—被服材料に関する知識の必要性を感じる背後にある要因—, 山口大学教育学部紀要, 第43巻, 127-136.
- 三輪聖子, 辻泰子, 夫馬佳代子, 西村敬子（2001）家庭科教育における被服領域の現状と動向—被服製作の実態と意識—, 岐阜女子大学紀要, 第30号, 153-159.
- 永田晴子（2003）女子大学生の家庭科のイメージの変化—教職課程履修者の場合—, お茶の水女子大学人文科学紀要, 第56巻, 263-284.
- 雙田珠己, 鳴海多恵子（印刷中）東京学芸大学紀要